

れき じん

となん歴史民だより vol.36

Morioka tonan history and folklore museum

平成 25 年 9 月 30 日発行

発行 盛岡市都南歴史民俗資料館 盛岡市湯沢 1-1-38 Tel/Fax 019-638-7228



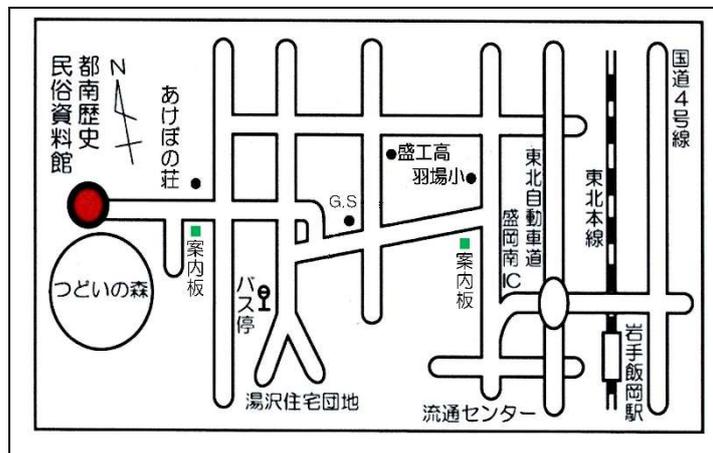
市民参加展 「澤井敬一コレクション 『もりおか』露地裏の珍品・稀書展」
期間：平成 25 年 9 月 14 日(土)～12 月 1 日(日)
好評開催中です！

是非ご来館ください。お待ちしております。

— もくじ —

- ・市民参加展「澤井敬一コレクション 『もりおか』露地裏の珍品・稀書展」の概要と出展資料について
- ・都南公民館開館 20 周年記念事業について
- ・資料は語る㊦
- ・盛岡市所在
指定・登録文化財紹介㊦
- ・となんの昔ばなし㊦

MAP☆ACCESS



○利用案内

- 開館時間 午前9時から
午後4時まで
- 入館料 無 料
- 休館日 月曜日
(休日に当たるときは、
直近の平日)
年末年始

市民参加展「澤井敬一コレクション 『もりおか』 露地裏の珍品・稀書展」の概要と出展資料について

盛岡市都南歴史民俗資料館 河野 聡美

当館では、9月14日から12月1日まで市民参加展「澤井敬一コレクション 『もりおか』 露地裏の珍品・稀書展」を開催している。毎年、市民参加展と題し地元の個人収集家の協力のもと多様な内容の企画展を催している。今回の企画展では、上記企画展の名称のとおり盛岡と関わりの深い資料を展示しているが、もともと個人所有ということもあり我々の目に触れる機会の少ない資料が多い。中でも、今回特筆されるのは、新聞各紙に取り上げられた宮沢賢治自筆入りの花巻地質図であろう。当館で展示しているのは複製ではあるが、この花巻地質図は初公開である。そのため、開催後の入館者からの注目度は高いといえる。

また、今回澤井氏から提供いただいた資料には、旧盛岡銀行本店落成関係資料や盛岡芸妓関連資料など、貴重な資料が多数ある。

旧盛岡銀行本店落成式は明治44年(1911)5月7日に行内で執り行われ、その後秀清閣で園遊会が催された。来賓は約480名にもものぼり、明治44年5月9日付の巖手日報の記事によると、園遊会が終わると記念品として縮緬伏紗、記念扇の末広一對、記念絵葉書の3種類が贈られたことが分かる。そのうち、本展では末広一對と記念絵葉書を展示しており、当時の様子を顧みることができる。現在、改修工事中の旧盛岡銀行本店が、今後どのように文化財として活用されていくのかにも期待したい。

今回展示の盛岡芸妓関連資料は明治時代後期から昭和初期のものであり、この時期は正に盛岡における花街の全盛期にあたる。盛岡には「幡街」と呼ばれた八幡町と「本街」と呼ばれた本町が、互いに芸を競いながら盛岡の街を華やがせていた。盛岡芸妓は、東北でも芸が優れていると評価されていた。明治25年(1892)に盛岡を訪れ約4年間盛岡芸妓に厳しく常磐津の指導をした常磐津林中や、度々園遊会を開き盛岡芸妓の発展に貢献した原敬など多くの人の協力を得て長い歴史を経てきた。現在も、新たな盛岡芸妓が増え活躍を続ける盛岡芸妓の手書き稽古本からは、彼女たちの芸に対するひたむきさが感じられ、来館者におすすめしたい資料の1つである。

また、今回の企画展には盛岡ゆかりの資料が並んでいるため、関連する人物を多数扱っているのも1つの特徴といえる。しかし、これらの人物同士は全くの無関係ではなく様々な形で縁している場合が多く、そのつながりを知ることによって本展はまた違った見方ができるのではないかと思う。そのいくつかを紹介すると、文政10年(1827)盛岡に生まれ藩校作人館の教授を務めた那珂梧楼と、盛岡の藩政において権力を持っていた田鎖左膳の書が本展で展示されている。田鎖左膳は、那珂梧楼にとって兄春庵を死に追いやった人物であるため、梧楼にとって左膳は敵である。また、盛岡藩家老で大規模な百姓一揆により失脚した石原汀の書もあり、汀の死後東京にある墓所から分骨して盛岡に埋葬したのが橘正三(号・不染)である。彼は常磐津林中と親交があったため林中に関する執筆もしている。また、作家の鈴木彦次郎も岩手日報において「常磐津林中」を連載した。「南部叢書」や「岩手県史」などの編纂に尽力した教育者、郷土史家の新渡戸仙岳は、岩手日報主筆のとき同紙に石川琢木の「百回通信」を連載している。更に、生活に困窮していた時期の琢木の依頼により、当時東京朝日新聞編集長だった佐藤北江が仕事を提供している。上記に挙げたすべての人物に関する資料を、本展で展示している。

これらのちょっとした歴史とつながりを知るだけで、資料は見る人へ更に面白い一面を見せてくれるはずだ。

🏛️ 都南公民館開館20周年記念事業について 🏛️

盛岡市永井の都南文化会館と都南公民館は、今年開館20周年の節目を迎え9、10月に様々な記念事業を開催しています。9月は15日と23日に「都南の歴史ロマン旅」として旧都南村の史跡・名勝をバスで巡るツアーがありました。この旅には、今年の3月まで盛岡市都南歴史民俗資料館の指導員として勤務、現在は秋田県小坂町教育委員会学芸員の安田隼人氏が解説・案内役として同行しました。初日はあいにくの雨でしたが、参加者の皆さんは積極的に見学されていました。ロマン旅初日の15日、最初の見学場所として当館に来ていただき、常設展のほか現在開催中の企画展も関心を持って見ていただけました。また、嬉しいことに23日の最終見学場所も当館でした。両日の見学場所については下記の通りです。

《9月15日》盛岡市都南歴史民俗資料館→前林雀神社→夏屋敷のキャラボク→朝前山清水寺→竜洞山大泉院→法領神社

《9月23日》夏屋敷のキャラボク→早池峰山瀧源寺のシダレカツラ→大ヶ生金山跡→北野神社→盛岡市都南歴史民俗資料館

また、9月29日には「都南今昔物語」として都南の民話を声と音で楽しめる企画もありました。10月の企画では、19日の記念植樹や19～27日に開催される「あのころの都南なつかしの記録」の展示もあり、昔と今の都南を知る絶好の機会となっております。皆様も、是非ご参加ください。



【当館の見学風景】



【大ヶ生金山万寿抗の現地説明風景】

🏛️ 当館より御礼 🏛️

当館は、8月21日に来館者10万人を達成いたしました。旧都南村の昭和54年(1979)に開館し、開館35年を迎えた当館は、地域の皆様のご支援、ご協力により来館者10万人を達成することができました。都南地域の皆様をはじめ、当館にご来館いただきました皆様に、職員一同心より感謝申し上げます。今後とも、当館をよろしくお願いいたします。



【銅像阿弥陀・薬師・観音立像懸仏】

懸仏とは、御正体(みしょうたい)ともいい、鏡面に仏像や神像が彫刻されたものです。社寺などに奉納され、信仰の対象として吊懸けられるもので、神仏習合・本地垂迹思想のもと発展しましたが、慶応4年(1868)布告の神仏分離令にともない、懸仏の多くは姿を消しました。

当館所蔵の懸仏は、雀神社にあった阿弥陀・薬師・観音の三尊像が彫られた銅製の懸仏で、裏面に刻まれた銘文から製作年代は享保3年(1718)であることが分かります。銘文には、他にも作者や依頼者の名前まで詳細に記載されているため旧都南村に現存する重要な資料となります。この懸仏は、現在当館の新館2階常設展に展示されています。県内における懸仏の数は約260点にも及び、製作年代も平安時代から江戸時代までの懸仏が存在し長い間地域の人々に信仰されてきたことが分かります。



原敬生家 1棟

原敬記念館にある原敬生家は、原敬が生まれてから明治4年(1871)15歳で上京するまで生活した場所です。盛岡藩家老で原敬の祖父であった原直記が、嘉永3年(1850)大改築を行った武家屋敷で、現存するのは居間や女中部屋など当時の5分の1程になります。また、大正13年(1924)玄関・応接間などが増改築され、今の姿になっています。

家は、檜や杉が使用された寄棟造の茅葺きで質素な造りとなっていますが、貝の意匠の釘隠しなども見受けられます。生家は、毎年春から秋にかけて定期的に開放されています。

参考・引用資料：盛岡市教育委員会『もりおかの文化財』、2008。

『くるみ沢の水けんか』

となんの昔ばなし三十六

今から四百年ほど前、今の矢巾町の広宮沢山のくるみ沢の水は、広宮沢地頭の管理でした。隣の湯沢村で三十疇の稗田を作りましたが、水不足でくるみ沢から水をとって使っていました。広宮沢村の地頭はこれを知って、上村弁藤という者を水の見張番にしました。

ある夜、稗田を作っている湯沢村の若者が、広宮沢村の田に流れる堰口を全部止めて、自分の稗田の方へ水が流れるようにしました。弁藤が若者を問い詰めると、湯沢の若者は高ぶって稗田の持ち主だと答えました。弁藤は、若者が堰を止めたことに怒って鳶嘴(とびのはし)を振りかざすと、若者も大鍬を持って飛びかかり、若者はみけんを打ち砕かれて死んでしまいました。

このことがあって、湯沢の地頭は「若者が水引に行ったところ、上村弁藤に殺された。どんな恨みがあるのか返答がほしい」と、広宮沢の地頭に手紙を出しました。すると、「いたずら者に水をとられて困り、弁藤を見張りとした。そこへ、いたずら者が堰を止め、弁藤に悪口を言い、飛びかかったが誤って自分の鍬のみけんを打ち込んでしまった。堰口には大石を置いて、長くとめ固める。」と返答があった。事実と違うことに怒った湯沢村の地頭は、飯岡城の殿様にお願ひして戦おうと大騒ぎになった。これを聞いた赤林の地頭が、

「とにかく湯沢は広宮沢の水を一言のあいさつもなく、勝手に使っているとは地頭の悪い計らいだ。広宮沢が三十疇の水しかやらんと決めたほうがよい。」

と言ひ、誰も文句のつけようもなく、ようやく争いが収まりました。

出典：『となんの民話』(都南歴史民俗資料館、一九八八)。